

戦争をどう捉えるか～是枝裕和さんの視点～

2016年7月28日

聞き手：早稲田大学政治経済学部3年 小山田将大、小山雅浩 編集：吉田悠斗

2015年（平成27年）は、戦後70年という節目の年であり、高橋恭子ゼミ5期生の私たちは、「記憶と記録」というテーマの下、戦争を風化させないための取り組みを行っている人取材してきました。今回は、早稲田大学理工学術院教授の是枝裕和さんに、彼がプロデュースした『シリーズ憲法～第9条・戦争放棄「忘却」』と『戦後70年特別番組「いしぶみ」』について聞きます。



是枝裕和（これえだ ひろかず）
映画監督・テレビディレクター

1962年、東京生まれ。87年に早稲田大学第一文学部文芸学科卒業後、テレビマンユニオンに参加。主にドキュメンタリー番組を演出、14年に独立し、制作者集団「分福」を立ち上げる。

主なテレビ作品に、『しかし…』（91年／フジテレビ／ギャラクシー賞優秀作品賞）、『もう一つの教育～伊那小学校春組の記録～』（91年／フジテレビ／ATP賞優秀賞）、『記憶が失われた時…』（96年／NHK／放送文化基金賞）などがある。

95年、初監督した映画『幻の光』（原作 宮本輝、主演 江角マキコ・浅野忠信・内藤剛志）が第52回ヴェネツィア国際映画祭で金のオゼッラ賞等を受賞。11年、『奇跡』が、第59回サンセバスチャン国際映画祭最優秀脚本賞受賞。12年、初の連続ドラマ『ゴーイング マイ ホーム』（関西テレビ・フジテレビ系）で全話脚本・演出・編集を手掛ける。13年、『そして父になる』で第66回カンヌ国際映画祭審査員賞他国内外の賞を多数受賞。15年、『海街diary』が同部門に正式出品。現在最新作「海よりもまだ深く」公開中。

“KORE-EDA.com”の本人プロフィールより抜粋

<番組内容>

『シリーズ憲法～第9条・戦争放棄「忘却」』

2005年5月4日（水）02：43～03：38にフジテレビにて放送。番組は1962年に東京で生まれ、ウルトラマンを正義だと信じながら育ったという是枝さんの生い立ちから始まる。そうした是枝さんの個人史の旅と、制作に至るまでの約半年間、実際に是枝さんが経験した旅の2つで構成され、様々な土地を訪れながら、戦争の記憶というものがどのように記憶され、また忘却されるのかを問う。（番組ホームページ参照）



『第9条・戦争放棄「忘却」』について

小山田：まず初めに、『第9条・戦争放棄「忘却」』を制作するに至った経緯を教えてください。

是枝：ぼくがフジテレビのNONFIX（※1）でテレビドキュメンタリーに最初に関わった枠で、91年、そこで放送局の人たちと関わりが生まれて、縁があって、何度かシリーズ企画をやっていて、最初にやったのが91年の『在日コリアンを考える』という五本シリーズを色々な制作会社が集まってやったの。テレビマンユニオンとテレコムスタッフと、何社か集まって。その次に、95年に『ドキュメンタリーの定義』というタイトルでまた4社が集まって。ドキュメンタリーって何だろうかという番組を作ったの。フジテレビの編成担当が何年かおきが変わるので、新しい担当になったときに、またシリーズ企画が出来ないでしようかと言われて、じゃあ周りの仲間に声をかけてみますと言って、森達也さんとテレコムの長嶋甲兵さんとスローハンドっていう制作会社とドキュメンタリージャパンと、その後フジテレビの報道が入るんだけど、最初はその4社で集まったんだよ。何か同じテーマで共作しようという話になり、誰が言い出したか忘れましたが、憲法になりました。そういう経緯です。憲法に決まった時点で森達也さんが1条をやりたいと言って、その辺でフジテレビの報道が入って表現

の自由を扱う 21 条をやりたいと言ったのかな。それでテレコムが憲法改正をやりたいと言って、それぞれが 1 条ずつ選んでいったときに、自分は 9 条を選んだ。

小山田：この番組のキーワードとして「加害」「忘却」「被害者の心情」が挙げられると思います。これらを題材とした理由は何かありますか？

是枝：憲法が加害の記憶を明解に刻んでいるから。そのことが忘れられかけているという危機感が一つ。そして日本の反戦・反核運動がなぜ世界的な広がりを見せないかと言えば、それは被害者意識からスタートしているから。要するに、あの戦争における被害者は私たちではないという意識が欠如している。経験としては、自分史の中で、自分の両親がどのように戦争を経験したか考えたときに、僕の父親はシベリア抑留されているので、やっぱり被害体験なんだよ。それは決して植民地統治下での台湾のことではなく、赤紙もらって出兵した満州でもなく、シベリア抑留なんだよ、彼は。で、母親は明らかに東京大空襲なんだよ。どっちも被害体験なんだよ。だから、人って個人史においては被害体験が強烈に残っちゃうからさ、そういう戒めもあって、あの憲法は明解に加害とそのことの反省を書いたんじゃないの。という、趣旨で作ってみようかなと思ったんです。だから、通常そのときに、両論併記にして欲しいという暗黙の了解というか、見えない圧力がかかってくるんだよ。なので、両論併記にしないためにはどうするかということを考えて、あれは憲法についての番組ではなくて、自分史における憲法を自分語りする、「私ドキュメンタリー」というスタイルを採っているので、両論併記にはなりません、ということを最初の企画で宣言したの。それで押し切ったって感じです。

小山田：世間からのリアクションは何かありましたか？

是枝：リアクションがとれるほど視聴率がなかったの…。まあでもやってよかったんじゃないの。見たの？

小山田：見ました。

是枝：じゃあいいじゃん。そうやって若い子が見てくれたのなら。



番組紹介「怪獣使いと少年」（1971年11月19日TBS系列放送）

正義のヒーロー、ウルトラマン。宇宙から侵略してきた怪獣を、鮮やかにやっつける。男性なら誰しも一度は憧れたはずだ。シリーズ全体を通して、「正義」（＝ウルトラマン）と「悪」（＝怪獣）という明確な構図が表れている。

しかし『ウルトラマン』には、「正義とは何か」を問う教訓ともいえるべきエピソードが存在するのだ。特に『怪獣使いと少年』は、シリーズ史上屈指の問題作として知られる。河原でひたすら穴を掘り続ける少年。周囲で不可解な怪奇現象が目撃されたことから、町の人々から「宇宙人」と呼ばれる。近所の不良から度重なるいじめを受けてもなお、少年は穴を掘り続けるのであった。まるで何かを捜し求めているかのように。

郷隊員（ウルトラマン）は少年の動向を調査していくうちに、驚くべき真実に辿り着く。本当の宇宙人は少年ではなく、少年とともに暮らす金山さんという老人だったのだ。しかし金山さんは、密集した工場地帯による環境汚染により体を蝕まれていた。わが子のように育ててくれた金山さんへの恩返しとして、一刻も早く故郷のメイツ星へ帰そうと、少年は地中に埋まった宇宙船を掘り出そうとしていた。

そんな中、「宇宙人」の噂は町中に広まり、武器をもった人々が河原に駆けつける。金山さんの正体が発覚し、暴動は激化。鳴り響く銃声とともに、金山さんは息絶える。すると、金山さんの念力によって封じ込められていた怪獣「ムルチ」が悲鳴を上げ、地底から蘇る。

慌てふためく町の人々は郷隊員に助けを求める。しかし、郷隊員はじっと佇んだままだ。「怪獣をおびき寄せたのはあんたたちだ。まるで金山さんの怒りが乗り移ったかのようだ。」

破壊されていく町をほうっておくわけにはいかず、ウルトラマンに変身。果たしてこれが「正義」なのか。ウルトラマンは己の中の矛盾と葛藤しながら、光線でトドメを刺すのであった。

小山田：『怪獣使いと少年』は是枝さんが当時 9 歳の頃に放送されましたが、実際に当時見て「加害性」を意識し出したのですか？

是枝：明解に言葉にして見ていたわけでないけど、テレビの体験としては強烈に残っていたので、ずっと引っかかっていた。

小山田：それ以降ウルトラマンに対するイメージや見方は変わりましたか？

是枝：あれ一本でというわけではないけど、ウルトラマンは時々そういう回があるから、正義って何だろうかって揺らぐ回があるでしょ。あれも正にそういう回だったからね。あそこまで怪獣と宇宙人が被害者として出てくるって、結構強烈だった。「私たち」の側が、彼らに対して石を投げたり、パンを売らなかったり、おかゆを踏み潰したりするわけだよ。その居心地の悪さっていうかさ、私が明解に「そちら側」にいることを突きつけられるからね。その体験は大きかったと思います。大人になる上で。

小山田：政治や軍隊という存在を自分のものとして考える経験がなかったことを「後ろ向きの個人主義」と表現していましたが、それは現代の若者にも通じることであると思います。戦争を教科書の中でしか学んでいないので、自分の体験として考えることがあまりないのでしょうか。つまり戦争教育に問題があると思うのですが、現代の若者が戦争を認識していくために、今の戦争教育に求められていることは何だとお考えですか？

是枝：常識だと思われていることを疑うことじゃないの。本当に「戦後」70 年なのか。本当に戦争は終わったのか。終わってない場所もあるんじゃないか。もしくはもう始まっているのではないかと疑ってみることが大事じゃないの。『怪獣使いと少年』もそうだと思うけど、安易に信じないということを教えるべきだと思うし、正義は一つではないというさ。立場が違えば正義ではないことも教えるべきだと思うよ。それは歴史だけには限らない。あとちゃんと憲法を教えるべきだね。教わってないでしょ？

小山：条文を暗記するだけだったと思います。

是枝：そうなんです。やってきてないんですよ。

小山：大学の授業になって初めて、一つ一つの条文の言葉の対象とか、主語について、法学部の授業を取って初めて勉強しました。小中学校でそういったことを勉強する機会はなかったですね。

是枝：義務教育ですべきだと思います。

小山田：続いて、是枝さんのお父様についてお聞きしたいと思います。生前、父親の話には耳を傾けなかったとおっしゃっていましたが、いつ頃から是枝さん自身が「忘却」していることにお気づきになったのですか？

是枝：ぼくが忘却をしている？それを忘却と呼ぶのか？

小山田：お父様のお話に聞く耳を持たなかったということは、戦争に関心がなかったと勝手に解釈したのですが。

是枝：父親に関心がなかった（笑）。戦争にも関心はなかったよ、もちろん。「後ろ向きの個人主義」はぼくらの世代から始まっているからさ。ずっと安穏とした日常が続いていくという、もう政治の季節はすっかり終わってしましたし、団塊の世代がそこで失敗した。あえて言いますが、無残な姿を見ていたので、そういうものにぼくは幻想を持たなかったから、学生運動的なことに。そうなるともう、オタク世代なのさ。僕自身はオタクではなかったけど、結局、自分の好きなものに囲まれている状態が幸せっていうさ、そこだけが世界というだけで生きていけると思っちゃったの。ぼくもそう思っていたと思うよ。その間違いに気付いたのは、厳密に言えばテレビの仕事が始めてから。もちろん大学生になって、戦争についての本を読んだし、映画も見だし、ある種の気付きにはなっていると思うけど、現実的に自分が閉じていたのではだめなんだと危機感を持って認識したのはこの仕事を始めてからですよ。27、8（歳）かな。

小山田：それは何か携わった番組できっかけがあったのですか？

是枝：そうだね。いくつかの番組で。最初からフィクションをやっていたらそうは思わなかったかもしれないけど、テレビのドキュメンタリーをやることで、結局他人と話さなくちゃいけないし、他人に取材しに行かなくちゃいけないし、その人のことを理解しようとしなくちゃいけないし、自分を外に開いていかざるを得なかった。それが自分を社会化したと思いますよ、ある程度。まあその辺で、やや父親のことが関心の一つにはなったと思うけど、ちゃんと向き合って話す前に死んじゃったから。

小山田：是枝さんはこれまで数々の映画作品を手掛けてきたと思うのですが、是枝さんの母親像は『歩いても歩いても』（※2）で描かれています、お父様から着想を得た作品はありますか？

是枝：ない。

小山田：今後作る予定はありますか？

是枝：うーん、ない！

小山田：何か理由があるんですか？

是枝：明解なイメージが像を結ばない（笑）。

小山：授業の中で、『歩いても歩いても』が弱冠父親の話になっているとおっしゃっていましたが。

是枝：表面上は母親の話だけど、老いていく父親と息子の話が一応裏テーマではあるけどね。テーマが「不在の父」であると言うならば、『海街 diary』（※3）だって、オリジナルではないけれど「不在の父」がテーマだったし、実験映画ですけど『DISTANCE』（※4）だって「不在の父」がテーマでしょうし、『誰も知らない』（※5）だって、あれは出てこないけれど父親に向かっていく話だろうし。そういう存在なんですよ。だから具体的に自分の父親を描くかと言われると、描きようがないんだよなあ。記憶がないからあんまりなあ（笑）。もう少し像を結んだらやる可能性はなくはないんですけど、別に自伝の作家ではないので、そこを意識的にやらなければいけないと思っているわけではないです。やる時がきたらやるだろうなとは思いますが。

小山田：番組の終盤、かつて台湾神社のあった裏山の頂上でカラオケを楽しむ町の人々が映し出されます。個人的に異常に長く感じたのですが、長回しで撮った狙いはあったのですか？

是枝：単純に驚いたから。あそこから北島三郎が聞こえてきた驚きを、たぶんあまり編集せずに出したのだと思うけど。バランス変えているんだよ、あそこだけ。

小山田：番組最後に「今回の旅の中で、僕をほんの少しほっとさせる時間であったことは

間違いない。」と締めくくりましたが、なぜ「ほっとした」のでしょうか？

是枝：暴力とは関係のない「忘却」があったから。

小山田：でも結局のところ「忘却」していることに変わりはないじゃないですか。それなのにどうして「ほっとした」のですか？

是枝：全ての忘却が罪だとは思いませんよ。個人史における忘却を、忘れることで許されるということを、僕は正直言うとそれほど否定しえないなと思っている部分があって、もちろん忘れることが他者にとって暴力的に機能することは多々あって、難しいところだけど、単純に忘れないことだけが正しいとは思っていない。忘れないと生きていけない人もいると思う。忘れてあげることが優しさの場合もあると思うよ。と思いますが、どうですか、違いますか？

小山田：おっしゃる通りだと思います。

是枝：ネットとかでさ、小さなミスを、いつまでもねちねち言っている連中を見ると、なんてケツの穴の小さい…（笑）。それは正しさではないと思うよ。

小山田：今年は戦後 70 年ということで…

是枝：ある部分ではね。沖縄ではまだ終わっていないよ。

小山田：そうですね。今年は安保法案が採決され、それに伴い集団的自衛権の行使が容認され、「戦争」というワードが国民の頭の中をちらついたと思います。特に憲法 9 条の存在意義が失われつつあると思うのですが、是枝さん自身どのようにお考えですか？

是枝：もう少し具体的に。

小山田：集団的自衛権は憲法に違反していると考えの方が大半だと思うのですが。

是枝：もちろんですよ。あれは明解な憲法違反ですよ。違反しているの分かっていると思うよ。分かってやっているんだよ。これぐらいの反発だったら、強行突破しても人は半年も経てば忘れると思ってやっているんだよ。だからそれに抵抗するには「忘れない」と言うしかないよね。ぼく実はそんなに護憲じゃないんだよ、実は。一行たりと

も変えるべきじゃないと全然思っていない。一行たりとも変えるべきじゃないと思っ
てきたのにこれほど蹂躪されるということは、一行たりとも変えるべきじゃないとい
う論理はもう通用しないと思っている。だってこれだけ踏みにじれるんだもん、変え
ていないのに。だとすると、明解に、憲法改正を、3 分の 2 でさ、憲法改正やって、
国民投票して、否決するしかないんだよ、今度は。否決して、私たちがもう一度この
憲法を選び直すというプロセスを踏まないと、たぶんね、自分達のこととして考えな
いと思うよ、憲法を。そのためにも、今年の一年の、憲法が皆の意識の中に浮上した
というのはいいきっかけだったんじゃないの。全うなプロセスを踏むだけの誠意がな
いからさ、今の現政権は、だからそう単純に国民投票すれば、とは言わないけど、本
来的に言うと、このように拡大解釈で、集团的自衛権を認めるやり方よりは、彼らは
私たちの公僕に過ぎないのであって、民主主義である以上私たちが決めるんだから、
憲法をこういう風に変えるところというメリットがありまして、こういうリスクがあり
ます、どちらを選びますか、という選択肢として提示すべきだよ。それで国民投票
でどちらかを選べば、それはそれで変えていく方が正しいとは思いますが。政治家
が全うだったら。ちゃんとリスクを提示する覚悟があるんだったら。みなさんが選ぶ
んですという節度があるんだったら。でもないから。ないので、ない以上、別の戦い
方をした方がいいのではないかという気がするけども、憲法は聖書ではないので。

NHK 総合テレビ『クローズアップ現代』”出家詐欺”報道に関する意見書

NHK の報道番組『クローズアップ現代』でやらせがあったとされる問題で、2015 年 11 月
6 日、放送局で作る第三者機関である放送倫理・番組向上機構（BP0）は意見書を公表した。
対象になっているのは、2014 年 5 月 14 日に放送された『クローズアップ現代 追跡 “出家
詐欺” ～狙われる宗教法人～』など 2 番組である。

この日の番組では、困窮する宗教法人が多重債務者を出家させて戸籍上の名前を変えさ
せることで、住宅ローン詐欺の温床になっているという衝撃的な事実を告発した。 ところ
が放送の 10 ヶ月後、番組のなかで出家詐欺のブローカーと紹介された男性が週刊誌上で「自
分はブローカーではなく、記者にブローカーの演技をするように依頼された」などと告発
し、『クローズアップ現代』に「やらせ」があったのではないかの疑いが浮上したのだ。
これに対して NHK は 2015 年 4 月 3 日に調査委員会を立ち上げ、同月 28 日に調査報告書を
公表した。しかし、この報告書に対し BP0 は「まだ疑問点が残る」などして、番組制作過
程の検証に踏み切る。

こうして BP0 が意見書を公表するに至ったわけだが、この意見書ではその検証結果の報告
とともに、最後は「重大な放送倫理違反があった」として総務省や自民党を批判している。
総務省は 2015 年 4 月 28 日、NHK に対し『クローズアップ現代』について文書による厳重注
意をした。また同月、自民党情報通信戦略調査会が NHK の幹部を呼び出し、事情聴取を取

り行った。これらに対し、BPO は放送法の解釈修正を求め、放送の自由とそれを支える自律を守るために、国や政治家が干渉するべきではないと厳しく批判した。

今回の意見書作成に関与しなかったという同委員会の委員を務める是枝裕和さんは、11月17日に自身のホームページで見解を述べている。

是枝：この前の BPO の発表に絡めて言うとき、今回の放送法も、あれは 1950 年にできて、本来的に言うと、あれは権力が放送に介入しないための法律、要するに権力が私たちに放送の表現の自由を保障している法律なのね。それは憲法が権力の私たちに対する契約であるのと同様に、放送法もそれで出来上がっているんだが、放送法は憲法とは違って、この 65 年の間に、ちょっとずつちよつとずつ変えられているわけよ。ちよつとずつちよつとずついじくっているうちに、不偏不党であるということは、憲法が私たちに保障している表現の自由と繋がりがあるもので、それは公権力が放送局に不偏不党を保障しているのだという考えすら、つまり放送法 1 条の目的すら、逆に解釈し始めている、公権力がね。それは条文の変更を、ちよつとずつちよつとずつ認めてしまったが故の結果だと思う。とすると、憲法も、ちよつとずつちよつとずつ変えていくと、いつかこうなるぞという、いいお手本、悪いお手本になっている。反面教師としての放送法の歪んだ解釈というのを捉えていけば、憲法がもしちよつとずつちよつとずつ変えられたときに、何十年か経ったときにさ、書かれた時とは明らかに違う趣旨の法律になっていることに気付く。まあもうなりかけているけどさ。彼らの解釈の中ではね。国民の義務をあそこにも書こうとしているでしょ。あれは放送局の義務だといっているのと一緒にじゃない。それは違うといっているしかないけど、ぼくの立場なら。

小山：放送法は今後どうなりますか？

是枝：放送法改正に向かうでしょ、自民党は。菅さんは総務相時代に改正案出して、2007 年だか 2008 年に。罰則規定が設けられているよ。だからそこに向かうんじゃない。世論も見方につけて。

小山：制作者側からの働きかけで昔の放送法に戻すのはやはり難しいですか。

是枝：やらないと。難しいとか言っている場合じゃない。もう侵食されているんだから。自分がそれを職業としているのであれば、それは責任としてやるべきだと思うよ。そこに関わっている連中が、恩恵だけ受けるんじゃないくて…大丈夫？怒っているわけじゃないよ。怒っているけど（笑）、別の相手に対して。君たちに怒っているわけじゃないから大丈夫。

小山田：映像の創り手として、今後若者世代にどのようにして戦争を伝えていけると思いますか？映像が持つ力とは何でしょうか？

是枝：戦争の何を伝えたい？

小山田：そもそもなぜ戦争が起きたのか、その具体的な経緯ですとか、戦争に携わった人々の思いですとか。正直戦争は私たち若者にとって身近な事柄ではないので…。

是枝：何で身近じゃないの？今世界中で戦争は起きているじゃん。

小山田：そうですけど、自分達が直接当事者としては関わっていないと感じます。

是枝：だとすると、今の言葉を受けるのならば、「君は当事者だよ」という番組を作るしかないよな。今起きている戦争の当事者である、と。「かつてあった戦争の責任は、少なくとも法的ではないにせよ、道義的責任は今の君たちの肩にも乗っているよ」という番組を作るしかないんじゃないの。それはやっぱり、当事者ではないという常識を色々な形で覆していくしかない。それはそう思った人間がやるしかないよな。あんまりそこをストレートにやったことがないからな。戦争映画を撮るかと言われたらおそらく撮らないし。戦争そのものの描写には興味がないので。例えば、素晴らしい戦争映画をある種見ればいいと思うけど、どちらかといえば、黒木和雄の『TOMORROW 明日』（※6）という映画があるんだけどさ、それが戦争中の長崎のある家族の一日、原爆投下の前の日の一日だけを描いている。要するに日常しか出てこない。この日常が失われるんだ、というのを見せている。落とされた後の悲惨さは一切出てこないと言っているが、そういう描き方もあるよね。俺はそういう表現が好き。ケロイドでどろどろになったものが生で出てくるよりも、ずっと俺には響く。だから、俺はそういうものが作りたい。そうじゃない人はそうじゃない人でいいんじゃない？

<注釈>

※1 1989年10月の放送開始以来、“NONFIX”（固定していない）の精神で、本質を追求するフジテレビのドキュメンタリー番組。

※2 『歩いてても歩いてても』…2008年公開。不慮の事故で亡くなった長男の命日に、家族一同実家に帰省する。

※3 『海街 diary』…2015年公開。古都鎌倉を舞台に織り成す4人姉妹の日常を描く。カンヌ国際映画祭コンペティション部門正式出品作品。

※4 『DISTANCE』…2001年公開。架空のカルト教団が起こした無差別殺人事件から3

年後、加害者の遺族は再び忌まわしい過去と向き合うことになる。カンヌ国際映画祭コンペティション部門正式出品作品。

※5 『誰も知らない』・・・2004 年公開。母親に捨てられた 4 人の兄妹が、長男を筆頭に懸命に生きようとする姿を描く。主演の柳楽優弥が当時史上最年少でカンヌ国際映画祭最優秀主演男優賞を受賞。

※6 『TOMORROW 明日』・・・1988 年公開。長崎に暮らすある家族の原爆投下までの 24 時間を描く。

コラム 1 「父・是枝兼蔵を巡る台湾の旅」 小山田将大

番組後半は、是枝裕和さんの父、是枝兼蔵の話から始まる。

1920 年、当時日本の植民地だった台湾で生まれ、高雄という町で少年時代を過ごす。高校卒業後、旅順工科大学の研究室で働き始めるが、召集を受け、入隊。満州の牡丹江という地で敗戦を迎える。

進行してきたロシア軍によりシベリアへ抑留され、3 年に渡る強制労働生活を送る。朝起きると、隣のベッドで寝ていた仲間が寒さと飢えで死んでいた。凍った土を掘って、その死体を埋めたと、息子である裕和さんは酒に酔っ払った父親からよく聞かされたそうだ。父親にとって、戦争は正に、被害体験として記憶されていた。

父親の死後、台湾のこと、シベリアのことをもっと聞いておけばよかったと、後悔の念が残った。そして 2004 年、ある映画のキャンペーンを兼ねて、父親の故郷である高雄の母校を訪れた。父親の少年時代を知らない裕和さんにとって、そこでの体験は不思議なものだったに違いない。旧正月を祝うため校庭で作られるおかゆ。父もきっとこの時期に食べていたのだろうと思いこむ。

台湾滞在最終日、かつて「台湾の靖国神社」と呼ばれた台湾神社の跡地の裏山に登る。一段一段、父親の面影を追うようにしっかりと踏みしめる。頂上に辿り着くと、異様な光景が待ち構えていた。町の人々が北島三郎の「まつり」に合わせて、カラオケを楽しんでいたのだ。まるで隠し撮りするかのよう、その様子を遠くから映し出される。約 1 分半に及ぶ長回しカットは、見る者に驚きと衝撃を与える。

『戦後 70 年特別番組「いしぶみ」』について

<番組内容>

『碑』

1969年10月9日、広島テレビにて放送。建物疎開作業中に生徒322人と教師4人が全滅した旧広島二中の悲劇を語り部・杉村春子と斬新なスタジオカメラワークで描いた作品。（番組ホームページ参照）

『戦後 70 年特別番組「いしぶみ」』

2015年8月7日、広島テレビにて放送。1969年に放送された「碑」のリメイク版。爆心地からわずか500mの川土手で、建物疎開の作業中に全滅した旧制県立広島二中の生徒が被爆して重傷を負い、やがて死を遂げるまでの行動と言葉を、広島出身で女優の綾瀬はるかが切々と、静かに読み上げる。また、当時の時代背景をジャーナリストの池上彰がレポートする。
(番組ホームページ参照)

小山：『いしぶみ』の話で思ったのは、リメイク前のものを見た時に、原爆で焼けた子どもの写真だったり、女優さんが手紙を読む時に、「死にました。死にました」って連呼したり、そういう衝撃を与える描写が多かったんですけど、是枝さんが夏に作ったバージョンは、ちょっと過激な描写を抑えて、シンプルに綾瀬さんがとうとうと読む形に変わっていたので、それが直接的な描写はあまり好きではないというところに繋がるのかなって思いました。

是枝：オリジナルの『碑』も直接描写じゃないけどね。あれも非常に節度のある、抑制の効いた素晴らしい番組だと思うよ。ただ、あの時代はあの形であの写真が出てくるところに意味はあったと思うけど、今もうみんな見てるでしょ、ああいうの。だとすると逆に、具体物になるべく出さずに、あの箱を川に見せたり、棺に見せたり、間接の上に間接を重ねる形で、みなさんの想像力の中に落とし込ませるっていう。具体物を見せずに、見た人のなかで起きる。作品の中で完成させずに、見た人の中で完成させるっていう形をとっているの、そういう風にもできるよねっていう、一つの試みですけども。

小山：そうですね。やっぱりシンプルなだけに、見てる側が試されてるっていうか。

是枝：見てる側のリテラシーを問われる。いじわるな番組だよ。

小山：イメージが湧いてこない人が見た場合は、多分あの番組はなんも響いてこないんでしょうね。

是枝：そうだね。でもしょうがない。俺のせいじゃない。そういう関係の中で成立している番組。届く層だけに届けばいい。

小山：リメイクした、もう一回作った理由っていうのは、僕が考えたのは、最初のバージョンは放送当時やっぱり原爆で亡くなった子どものお父さんとか生きている時代で

すけど、今だと被曝して生き残った人が一番上の世代というか、知らない世代が見ることになっているから、そういう新しく作ることに別の意味が加わるんじゃないかって考えたんですけど。

是枝：そう。

小山：あと放送当時、是枝さん7歳だと思うんですけど、その時リアルタイムで見たんですか？

是枝：見てない。初めて見たのは今年になってから。高円寺のドキュメンタリー映画祭で上映されたものを、プロデューサーの橋本さんが見せてくれて、それがきっかけ。

小山：夏になにか番組をやろうっていう企画があったんですか？

是枝：いや、ない。見た上で、これをリメイクしないかっていう話があってやることになった。なんかテレビでやりたいなって思ってたので。

小山：綾瀬はるかさんの演出について聞きたいんですけど、『海街 diary』に出てくる幸姉をすごく彷彿とさせるというか、イメージが引き継がれてるなって思ったんですけど。

是枝：それは意識してなかったな。

小山：死の面影を感じるというか。

是枝：それは考えてなかった。幸姉は学校の先生だった祖母の印象を引き継いで、あそこで演じてるから（役柄の話）、『いしぶみ』は学校の先生だから、そういうつながりはあるかもしれない。杉村春子は多分死んだ子どもの母親だろ？そういう意味では死んだ子どもに近いんだけど、綾瀬さんに言ったのは、立場的にいうと子どもたちを死なせてしまったという加害性を内包した教師で読んでくれっていう。親よりは距離は遠いが、子どもたちの死に対してはある程度の加害性を持っている。ぐらいしか喋ってないですけども。そういう読み方だと思います。

小山：どっちかっていうと杉村春子さんは、訴えかけてくる感じで読むのにたいして、綾瀬さんの場合は、加害性を内包した教師っていうのが意外で、なるべく抑えて、見ている側に託すような感じで演出したのかと思ったんですけど。

是枝：感情は抑えてるけどね。基本的には。要するに悲しみに振れないようにしてくれって言ったの。そこで振れすぎちゃうと被害者意識になっちゃうから。被害者意識に振れないようにしてくれって言ったの。

小山：あと、池上彰さんと生き残った方が喋った時に、演者の後ろ側から、観光客が向こうで通っているカットが印象的で。

是枝：観光客っていうか、平和記念公園のお参りに来る修学旅行の子達だろ？

小山：なんというか、僕らの戦争を知らない世代にとって、若干、原爆ドームとか戦争関連の場所って、ツアーの、観光の対象になってるなっていうのを考えてしまって。あのカットを使った意図っていうのはなんですか？

是枝：いいなと思ったから撮っただけ。

小山：もう一箇所あって。学校のところで。

是枝：子ども二人が。

小山：そうです。子ども二人が通る。

是枝：あそこで子どもが出てくる。あのおばちゃんが語ってる時間にふっと飛べるじゃない。あの子どもがいる。あんまり、そんなに深く考えてなかった。ああいうワンカメラで撮ってる時に、いかに本人の顔からカメラを外すかっていうテクニックだよな。

小山：じゃあ、あのカットに込めた意味だったりっていうのは？

是枝：どう思った？

小山：僕は、完全に意図的に、若い子たちがなんも知らないで歩いていく様子を写して、若い世代と当事者であった世代の意識の違いを表現したかったのかなって。

是枝：いいんじゃないか、それで。

小山：全体的ないしぶみから離れた話題になってしまうんですけど、戦争だったり憲法だったり、社会問題みたいなのを扱うときに、ドキュメンタリーという手法で表現なさ

ってるんですけど、それを劇映画でやらないのは理由があるんですか？

是枝：正直いうと、やりたいんだけどまだやれてない。

小山：以前授業で言っていた、ブラジル移民の話は、その流れの一環というか。

是枝：そう。もう10年経つけどまだやれてない。あれもまだ直接というか、日本が戦争へ向かっていく中で忘れられた人たちの話だから、棄民っていうのにすごく興味があるから、そこをやりたい。まだやれてない。

小山：やろうとしても映画会社の許可っていうか、それが難しかったりするんですか？

是枝：まあ、そうねえ、いやそこはやるしかないんだけどね。許可がどうこうじゃなくて、お金がかかるからね。自分の金でできるんだったらやりたいけど、そういうわけにもいかないから。まだできてません！

コラム2 「言葉を越えたもの」 小山雅弘

『落ち着いたらすぐ「あれ」するからさ』

『海街 diary』の冒頭で次女佳乃が放つセリフである。『海街 diary』では、セリフに「あれ」が多様される。「あれ」が指すものは、すぐにわかるものもあれば、想像するしかないものまで多岐に渡る。

是枝さんが意識して「あれ」を使い始めたのは、フジテレビで放送されたドラマ『ゴーイングマイホーム』からだ、同作のシナリオブックのあとがきで述べている。「あれ」を使うことによって、脚本の中にあるセリフを超えたところまで登場人物が広がっていくのだそうだ。直接的に表現するよりも、「あれ」という曖昧な指示後一つで観客の想像は膨らんでいく。

2015年夏に放送された『いしぶみ』は、凜として、それでいて感情を抑えた綾瀬はるか
の朗読と、周りに置かれた無数の木箱、このたった二つで構成されている。視聴者は情報
を与えられず、とうとうとした朗読者の声と、場面に合わせて様々に組み合わせを変える
木箱に全神経を集中することになる。川、棺桶、墓石。無機質な木箱の組体操が、私たち
の頭の中で一人でイメージを結んでいく。

この表現こそ『いしぶみ』の中では是枝さんが使った「あれ」なのではないだろうか。番組
の中で目に見える情報として確かなものは一切与えられない。具体的なイメージが全く
提示されていないからこそ、私たちは自分の想像力でもって番組に参加し、そしてそれを
完成させる。是枝さんが『いしぶみ』に仕掛けたものは、視聴者への信頼に基づく番組へ

の参加だったのだ。

戦争を伝えるということは、残酷な瞬間をまざまざと見せつけることではない。そんなことは今も世界中で起こっている。過去の悲しい出来事が私たちに一番リアリティを持って迫ってくるのは、『いしぶみ』を通して是枝さんが働きかけたように、私たちが心の中で犠牲者一人一人の顔や人生に対して思いを巡らせた時ではないだろうか。

<取材を終えて>

・気取った表現を書き連ねた私は、満足げにコラムを読み返す。まったく関係なさそうな「あれ」の話から、舌鋒鋭く本題へ切り込んでいくダイナミックな展開。素晴らしいではないか。「無機質な木箱の組体操」なんて、一体どこの小説家が生み出した表現なのだろう。…恥ずかしい。

自分にとって神様のような是枝さんに作品のことを取材した。録音を聞き返すと、なんて下手なインタビュアーなのだろう。是枝さんがさらなる質問を待って余白を作ってくださっても、「えー、では続いての質問ですが」違う違う！もっと寄せていけそこ！プレスが甘いんだよ！交代！ハーフタイムで交代！ってなもどかしさである。

拙い取材をいくら言葉のレンガで防御したところで（ほらまた）、私の取材力は全く上がっていないのだ。事前取材や、どんなことを聞くべきか、自分がどの程度話すか、のりしるをどれほど作るか。私が是枝さんから本心を引き出すまでには、まだまだ道が長い。

小山雅浩

・「加害の記憶としての憲法が忘れられかけている。」つまり、戦争に対する当事者意識の欠如が今も昔も大きな懸念として残っているのだ。日本の若者は「平和ボケ」という幻想にとり憑かれている。世界各地で今なお起きている戦争を、身近な出来事として認識していないのだ。「当事者ではないという常識を、色々な形で覆したい」という是枝裕和さんの思い。現実として今、若者の心を喚起し、少しでも戦争、そして憲法について自分なりに考えるきっかけを与えられる番組・映画が求められているのではないだろうか。

自分なりに考えるとは、つまり「常識を疑うこと」だと是枝さんは語った。果たして本当に「戦後」70年なのか。本当に戦争は「終わった」のか。私たちは当たり前のように太平洋戦争終結後の時代を「戦後」と呼んできた。学校で常に「戦後」と教えられてきたからだ。常識に捉われず、学校の教えに逆らおうとも、常に疑うこと。その能動的な姿勢が私自身を含め、現代の若者には足りていないと痛感した。

小山田将大